



石造文化財の保存

13. 講座を終えるに当たって

関 陽太郎 (せき ようたろう)
 埼玉大学名誉教授

平成8年8月号から始まったこの講座は本号で無事終了させることができた。講座の理想の組立てが始まってから約2年の間における講座担当委員の方々および学会事務局の方々のご苦勞と9人の執筆者の方々のご努力にあつくお礼を申し上げる次第である。

この講座が始まって2か月くらい経った頃に、あるゼネコンの技術研究所に長年勤めていた私の友人が電話をくれて、「土質(地盤)工学会にこういう講座を連載しようという雰囲気が出てきたのが印象的だ…」という。私は1991年に既に地盤工学会の中に「遺跡の土質工学的保存技術の調査委員会」が設けられ、1995年にはこの委員会主催の「遺跡の保存技術に関するシンポジウム」が開かれて、25もの数のたいへん優れた研究成果が発表されたことを話したが、まさに「現役の研究者」であるはずのその友人でもこの点での詳しいことをほとんど知らなかったのにはいささか驚いた。「建設工学の基礎部門の一つである土質(地盤)工学の発展を主な目標としている組織が『遺跡の保存』まで…」と考えたのも当然かも知れないが、本講座が我が国の地盤工学の研究者の視野を広げるのにかなり役に立っているのだと分かって、友人の電話に無言の感謝をした。

土・石で造られた遺跡の過去数百年～数千年の間における地表・地下・水中での風化・崩壊のプロセスを解析することは、我々が現在造っている各種の土木構造物の未来の風化・崩壊を予想し、それを最小限にする技術の開発につながることである。低～高レベルの各種核廃棄物の地下処理・処分技術の開発に対して、いわゆるナチュラルアナログの真剣な研究が必要であるのと同じである。

ただここで私たちが知っておかなくてはならないことは、「すべてのものはいつかは朽ち果てて、崩壊する…」ということである。「いつまでも、永久に風化・分解させない技術」を目標にするのは、「人間の慢り(おごり)」というべきであろう。

すでに風化・崩壊しかかっている遺跡のこれ以上の風化・崩壊をできるだけ抑えようとするのが「遺跡の保存技術」であり、それが「現在我々が造っている土木構造物の老朽化をできるだけ抑える技術」につながっている

表-13.1 講座「石造文化財の保存」掲載一覧表

回数	タイトル	執筆者	掲載号	掲載ページ
1	講座を始めるに当たって	関 陽太郎	平成8年8月号	37~38
2	岩石・石材における風化作用とその速度	松 倉 公 憲	9月号	59~64
3	岩石の劣化・風化に関する実験的研究	中 村 康 夫	10月号	55~60
4	石造文化財保存のための現地計測技術	内 田 昭 人	11月号	53~58
5	石造文化財の保護のための環境制御	福 田 正 巳	12月号	57~62
6	遺跡立地環境下での蒸発量計測の必要性とその方法	渡 辺 邦 夫 尾 崎 哲 二 森 豊	平成9年1月号	49~54
7	石造文化財の劣化現象と保存対策	沢 田 正 昭	2月号	49~54
8	日本の石造建造物	内 田 昭 人	3月号	49~54
9	敦煌莫高窟における壁面の塩類風化	朽 津 信 明	4月号	47~52
10	日本の石造建造物—石像建築・磨崖仏・石塔・石造品・庭園—	内 田 昭 人	5月号	49~54
11	大スフィンクス修復保存学術調査(その1)	谷 本 親 伯	6月号	49~54
11	大スフィンクス修復保存学術調査(その2)	谷 本 親 伯	7月号	47~52
12	アンコール遺跡の石材と劣化	内 田 悦 生 小 河 義 則	8月号	37~42
13	講座を終えるに当たって	関 陽太郎	9月号	42

というべきである。

人間の知恵の発達は速く、しかも果てしがないように見える。いま我々が持っている「石造文化財の保存技術」の一端をまとめたのがこの講座である。これもあつという間に古くさくなってしまいかもしれないが、それでよいのである。そうはいっても、この講座が月刊誌の連続ものとして読み捨てられるだけでは、いささか惜しい気がする。もし会員の皆さんのご希望が高く、(多少加筆してでも)単行本として学会から刊行されるならば講座世話人の1人として望外の喜びである。

本講座担当委員：安藤 伸，後藤政昭，小林 晃，
 武井正孝，千木良雅弘